



目 次

| | |
|---|----|
| 1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 | 1 |
| (1) 流域及び河川の概要 | 1 |
| (2) 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針 | 5 |
| ア 災害の発生の防止又は軽減 | 6 |
| イ 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持 | 7 |
| ウ 河川環境の整備と保全 | 8 |
| 2. 河川整備の基本となるべき事項 | 11 |
| (1) 基本高水並びにその河道及び洪水調節施設への 配分に関する事項 | 11 |
| (2) 主要な地点における計画高水流量に関する事項 | 12 |
| (3) 主要な地点における計画高水位及び計画横断形 に係る川幅に関する事項 | 13 |
| (4) 主要な地点における流水の正常な機能を維持 するため必要な流量に関する事項 | 14 |
| (参考図) 六角川水系流域図 | 巻末 |

1. 河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

六角川は、その源を佐賀県武雄市山内町の神六山（標高447m）に発し、武雄川等の支川を合わせて低平な白石平野を蛇行しながら貫流し、下流部において牛津川を合わせて有明海に注ぐ、幹川流路延長47km、流域面積341km²の一級河川である。

六角川流域は、佐賀県のほぼ中央に位置し、関係市町数は3市3町からなり、本川に武雄市、支川牛津川に多久市、小城市といった主要都市を有している。流域の土地利用は、水田や畑地等が約50%、山地等が約37%、宅地等が約13%となっている。

沿川には九州横断自動車道をはじめ、国道34号、国道203号、JR長崎本線、JR佐世保線等の基幹交通施設に加え、有明海沿岸道路、佐賀唐津道路、長崎新幹線が整備中であり、交通の要衝となっている。下流部の白石平野では稲作が盛んなほか、近年では、たまねぎ・れんこんの国内有数の生産地として知られている。また、流域内の武雄市では、温泉を核とした観光産業が盛んであり、この地域の社会・経済・文化の基盤を成している。さらに、天山県立自然公園、八幡岳県立自然公園等の豊かな自然環境に恵まれている。このように、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

流域の地形は、脊振・天山山系、神六山等に連なる丘陵性山地に囲まれ、中・上流部は、山地部と細長い平地で形成され、下流部は、古くからの干拓によって形成された白石平野が広がっており、これら低平地帯を大きく蛇行しながら流下し、有明海の湾奥部特有の大きな干満差の影響が河口から約29km付近にまで及んでいる。このようなことから、流域面積の約6割が内水域となっており、白石平野をはじめとする低平地帯では、内水排除が困難であり、古くから内水による浸水被害が頻発している。

一方で、地形上、河川水の利用が困難であることから水不足を補う地下水の過剰取水が行われたため、一時は白石平野を中心として、累積で最大約1mもの著しい地盤沈下が生じ、家屋の浮き上がり、水道管の破断等が発生し、社会的な問題となっていた。

河床勾配は、上流部では約1/60程度であり、中流部で約1/150～1/1,000程度で、下流部では約1/1,500～1/45,000程度の緩勾配となっている。また、長い感潮区間では、河底には砂が確認されており、河岸には有明海より遡上する浮遊粘土（ガタ土）が堆積している。

流域の地質は、上流部では新生代第三紀の堆積岩や火山岩などからなり、中下流部では有明海の海退や干拓等により沖積平野が形成され、極めて軟弱地盤である有明粘土層が広く分布している。

流域の気候は、内陸型気候に属し、平均年降水量は約2,000mm程度であり、降水量の大部分は梅雨期に集中している。

源流から大日井堰までの六角川中・上流部は、スギ・ヒノキからなる山林の中に矢筈やはずダムによる湛水域が形成され、ダム湖にはコイ、フナ類等の魚類が生息し、ヒドリガモが越冬のために飛来する。ダムより下流は、低山・丘陵地に挟まれた平地を流下し、瀬・淵や堰による湛水域が形成されている。瀬はオイカワやヨシノボリ類の産卵場となっており、淵や湛水域にカワムツやギンブナが生息している。河岸にはオギ群落等が群生し、一部の区間にはヤナギ林、竹林等の河畔林が形成され、サギ類等の採餌場、休息場となっている。

大日井堰から六角川河口堰までの六角川下流部は、白石平野を大きく蛇行しながら流下し、河口から約29kmにも及ぶ長い汽水域を有している。汽水域にはエツやワラスボ等の有明海特有の魚類とギンブナやモツゴ等の淡水魚が混在して生息し、独特の生態系を有している。水辺には連続して干潟、ヨシ原が形成され、干潟にはハラグクレチゴガニが生息し、ヨシ原はオオヨシキリの繁殖場、カヤネズミの生息場となっている。点在する江湖えごと言われる入江状の河川空間は、稚魚の成育場となるなど、六角川の多様性の一翼を担っている。

六角川河口堰より下流の六角川河口部は、有明海湾奥部特有の干満差が最大約6mにも及ぶ潮汐の影響を受け、広大な河口干潟が形成され、有明海と一体となっている。干潟には、ムツゴロウやシオマネキが生息しており、シギ・チドリ類やカモ類の渡り鳥の中継地、越冬地となっている。水際にはシチメンソウやヒロハマツナ等の塩生植

物が生育し、その背後にヨシ原が形成されている。

源流から古賀橋下流までの牛津川中・上流部は、山間地を流下し、瀬・淵やアラカシ・ムクノキ等のまとまった河畔林が分布し、変化に富んだ河川環境が形成されている。水辺にはツルヨシが繁茂し、瀬・淵が連続する流水区間には、オイカワ、カマツカ、カゼトゲタナゴ等の魚類が生息している。河岸には、タチヤナギ等の河畔林が点在し、水辺にはツルヨシが繁茂している。

古賀橋下流より六角川合流点までの牛津川下流部は、低平な白石平野を蛇行しながら流下し、約12kmに及ぶ汽水域を有しており、六角川下流部と同様の自然環境及び生物相となっている。

河口から沿岸部では、エツ等の有明海特有の魚類やヒイラギ等の海産魚の生息場となっている。また、六角川の汽水域はこれら海産魚の成育場としての役割を担っており、汽水域と有明海が連続性のある生物相を形成している。さらに、六角川河口を含む有明海は、「日本の重要湿地500」（環境省）に選定されている。

六角川における治水事業の歴史は古く、佐賀藩の家老成富兵庫茂安なりどみひょうごしげやすが江戸時代（17世紀前半）に始めたこととされ、上流の氾濫水から家屋等を防御するための横堤や捷水路等が築かれた。近代の本格的な治水事業は、昭和11年から中小河川改修事業として、佐賀県が牛津川の築堤等に着手したことに始まり、昭和23年7月及び9月洪水を契機に、昭和24年から古賀橋地点における計画高水流量を730m³/sとし、築堤、掘削等を実施した。

その後、昭和28年6月及び昭和31年8月洪水等を受け、昭和33年から直轄事業として、住ノ江地点すみのえの計画高水流量を1,600m³/sとし、築堤等を実施した。昭和41年には一級水系に指定され、同年に、これまでの計画を踏襲する工事实施基本計画を策定した。

さらに、流域の社会的、経済的発展に鑑み、昭和45年に基準地点住ノ江橋における基本高水のピーク流量を2,200m³/sとし、このうち、流域内の洪水調節施設により200m³/sを調節し、計画高水流量を2,000m³/sとする計画に改定した。以降、この計画に基づき、堤防の新設及び拡築、高潮対策として六角川河口堰の建設や高潮堤防の整備等を実施してきた。ところが、昭和55年8月洪水では、家屋浸水4,835戸に及ぶ甚大な被害が発生したため、激甚災害対策特別緊急事業を採択し、堤防等の整備を緊急に実施した。



[Redacted text block containing four lines of obscured content]

[Redacted text block containing two lines of obscured content]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]

[Redacted text block]





[Redacted]

[Redacted]

